

## 平林千奈満 教員

長崎大学大学院  
教育学研究科卒

大学院の2年間は、自分が抱いていた思いを行動に移すことができた2年間でした。私は専門性の高い教員を目指すとともに、学部時代に研究した「小学校におけるがん教育」を理論と実践の往還によって深めたいと考え、大学院に進学しました。

研究では、長崎市内の小学校で教育実習をさせていただき、その中で6年生の児童を対象に外国語科の授業を8時間、保健の授業を1時間実践させていただきました。健康やがんに関する内容を直接扱う教科ではなくても、「他教科等の学びや食育、SDGs などと関連づけて学びをデザインする」ことが、がん教育につながる学びを可能にすると明らかにすることができました。大学院修了時には学長賞をいただくことができました。大学院での学びと人脈は、一生の宝物です。

また、大学院の2年間は、長崎で生まれ育った被爆三世として原爆の歴史や平和の大切さを後世に語り継ぎたいとの思いから、長崎県・長崎市・長崎大学の3者で構成された核兵器廃絶長崎連絡協議会が主催する人材育成プロジェクトのナガサキ・ユース代表団の第11期・第12期生として、国内外で「長崎を最後の被爆地に」というメッセージを訴え、活動しました。特に2023年7月にウィーン、2024年7月にジュネーブで開催されたNPT再検討会議準備委員会に出席し、各国の代表と面会したり自分たちでイベントを開催したりしたことで、「自分たちの思いを伝えるだけでなく、他者の思いを聞き、相互に理解する」「意見や立場を超えて、ともに考える」、つまり「対話」の重要性を学ぶことができました。大学院の2年間では、全国各地の小中学校等で延べ1500人を超える方に長崎の原爆に関する出前講座を行う機会をいただきました。ここでの経験は、「長崎を最後の被爆地に」と願うだけでなく行動することで平和の輪を広げていこうとする現在のライフワークに繋がっています。

大学院の2年間の研究と課外活動は、長年抱いていた「命の大切さ」を伝えていきたいという思いを行動に移すことができた2年間でした。そして、現在は長崎の小学校教諭として勤務しております。忙しくはありますが、日々全力で児童と向き合い、児童の成長を間近で見ることができていることにやりがいを感じています。また、これまでの経験を生かし、児童とともに平和の大切さを「対話」によって考える平和教育を実践することもできました。

また、小学校教諭として勤務する傍ら、核兵器廃絶研究センター(RECNA)の客員研究員として、対話で平和と核兵器廃絶を実現するための「対話プロジェクト」に携わらせていただき、被爆者、長崎市長、長崎県知事、実業家など様々な方々に伺ったお話をホームページを通じて発信させていただいております。9月には、パリ国際大学都市のアメリカ館で講演する機会をいただき、祖父の被爆体験を中心に長崎の想いをお話さ

せていただきました。今後もこれまでの経験を生かし、教育によって「命の大切さ」を伝えていきます。

自分の思いを強く持ち、行動に移そうと自分らしく努力すれば、必ず誰かがサポートしてくれます。人とのつながりと感謝することを常に大切に、あなたらしく挑戦してみてください。